

キリスト道講演会 (奈良 第3回)

試練の中での希望 (三)

2012年2月11日 (奈良春日野荘)

奥田 昌道

太陽の光のように誰にでも 永遠の都を望み見て パウロの試練苦難 ひと新たに生まれずば
 キリストは人間とは逆 試練を通して我々の霊が高められていく お前は地上で精いっぱいやれ
 キリストの弟子 キリストの十字架 癒しの伝道 キリストの癒しと病院の医療 ペテロの手紙
 パウロ、ヤコブの手紙 「アメージング グレース」 祈り

●太陽の光のように誰にでも

「試練の中での希望」というけれども、しかしこれは不思議なんです。自分が一番、試練の中に放り込まれている。神さまのなさることというのは残酷ですよ。そうですね。そうでしょう。理論ではないですよ、事実なんです。

今年の3月11日、本当に日本中が震るわれた。あれだけの犠牲が伴いました。ああいう天災は、信仰があるからとかないか、そんなことは関係ないんです。そういうものに直面したときに、我々人間というのは何なんだろうか。神さまというのは何を思っているんだろうかと。当然、考えますよね。

それからしばらくして、NHKの宗教担当の方から電話がかかってきて、

「こういう時機だから宗教の時間に何かお話しただけじゃないか。現在、率直に奥田先生が思っておられ、考えられておられることを30分番組で話してほしい」

と言われた。それが『試練の中での希望』という水色の冊子に収録されています。その一番始めが、^{かなみつ}金光寿郎さんというディレクターとのインタビューの形で話が進んでいます。それが30分番組ですから、そこで話しきれなかったことや、また私は講演の形で話すのかと思っ用意したものがありませんでした。それを踏まえながら、東京で二回にわたって「試練の中での希望」という題で講演しました。その二つもここに収録しております。ぜひ、皆さま、これをお読みいただきたいと思えます。率直に私の信仰を告白しております。

私の信仰告白は、ひよつとしたら、オーソドックスなキリスト教会では受け入れてもらえないものかもしれない。といいますのは、キリスト教の方で、

「信ずる者は救われる。信じない者は救われない」

という、つまり簡単にいえば、

「信仰がなければ天国に行けない」

という。皆さんは、

「当たり前じゃないか」



と思われるか、それとも、

「いやいや。信仰のチャンスに恵まれれば信仰に導かれるけれども、そういうチャンスに恵まれない人だつてあるし、信仰がなくても素晴らしい生き方をしている人もあるし、信仰があるかないかなんていうことで二つに分けるのは感覚的に相容れない」

というふうに思われるか。

「いや、私は信仰でやってきたのだから、そんな信仰のない人たちが滅びるのは当たり前じゃないか」

というふうに、皆さん思われるか。私はここにも書いたんです、

「あの津波に呑まれた人たちの所へキリストがたちどころに、光よりも速いスピードで行つて、その一人ひとりの魂を抱き慰めておられるはずである。「あんたなんか嫌いだ」と言つて逃げる人は、キリストは無理やり無理強いはなさならない。けれども、「ああ、主よ。ああ、光の主よ」という思いで見上げる人は誰でも抱いて御国へ連れて行つてくださる。聖霊のキリストというのはそういうお方だ」

と。ナザレにいらつしやつた、ガリラヤ湖畔のキリストは肉体を持つておられるから、何万人の所へ一遍に行くことはできません。けれども、聖霊という姿の今のキリストさまは——ちょうど太陽の光は、どこの国の人にも輝いて照らしますよね。今日だつて太陽は輝いています。何万人もの、何億人もの人々にも太陽の光はすべての一人ひとりに届いている。そして暖めます。

「ああ、太陽の光が来ている。私は暖まっている」

と——キリストという方は私にとってはそういうお方なんです。どんな時にもです。

「神も仏もあるものか」

なんて叫んでおろうとも、それでも赦してください。十字架の上でキリストは祈られたではないですか。自分を十字架につけ、罵られる。その罵りに対しても、

「父よ、彼らをお赦しくください。彼らは自分で何をしているかわからないからです。自分の本当のすがたが分かっていないから。だから、今罵つたり何かして付和雷同しているのは偽りの姿です。本当は悪意ではありません。どうぞ、彼らを赦してやってください。」

と祈られた。私はもうそのことだけでも、キリストに頭がさがるんです。皆さんはどうですか。本当に自分は、いわれもなくですよ、全く無実の罪です。ピラトは許そうとした。彼は法律家ですから、そのくらいのことには分かっていますが、霊界のことはわからない。

「真理とは何ぞや」

なんて言つて絶句しているようなピラトですけれども。ことこの世の分別はできます。

「この人には何の罪もない。許してやってはどうだ」



と何べんも言った。ところが、

「十字架につけろ、十字架につけろ。バラバを許せ」

と言って、キリストを十字架につけた。あの十字架の坂道も大変でした。それを他の人が代わりに背負いましたけれども。そういう無実の罪で、何のいわれもなく、十字架につけられる。しかも、

「父よ、彼らを赦したまえ。彼らは自分のやっていることがわからないでいるからです」

と。そんなことを祈れるという、それだけでも、もろに心を打たれない人は人間ではないと私は思います。つまり分かっていない。本当にそのことが自分の問題として受けとられれば、これはもう頭がさがります。それが私の気持ちなんです。そういうキリストさまだから、どんな人の所へでも即座に行つて、抱きしめて天国へ連れて行つてくださるお方なんです。そう私は思っております。そういうことをここで告白しております。

●いろいろなことを通して本当のことを知りなさい

それが3月11日で、すべてが失われてしまいました。けれども、私たちの全てのものが、つまり見えるもの、宮々と地上で築き上げた文化文明、それが全部一挙に否定されてしまつても、なお残るもの、なお生き続けるもの、なお永遠なるもの、それが何かということ、ああいう出来事を通して神さまが我々に示していらつしやるのではないかと思う。私は、「罰だ」とかそんなことは思わない。

「いろいろなことを通して本当のことを知りなさいよ」

ということを我々に示しておられるのではないかと思う。

犠牲になった人たちが一番浮かばれる道は、生き残つた者が目覚めることです。生き残つた者がいい加減な、ふしだらな生活をなお続けければ、その人々は浮かばれない。私はそう思うんです。広島だつてそうです。長崎だつてそうです。東京の大空襲もそうです。みなそこでいわれなく犠牲になつた方々が本当に安らぐ道というのは、後に残る者がそれを踏まえて少しでもまつとうな生き方をする。

それは一言でいえば、キリストの心を心とするという生き方です。キリストの心を心とする。争いが無い、自己主張がない。人のことを思いやり、いたんでいる人のところへ駆け寄つて助けるといふ人としての全うなすがた。そういうすがたの人間が地上にあふれるようになれば、戦争はなくなるはずなんです。戦争というのは人の心から起こつてきている。それは経済問題もいろんな問題もありましょう。でも、全部エゴなんです。エゴと疑います。疑心暗鬼。イザヤ書や何かを見ましたら、

「神の知識、神を知る知識が地上にあふれるならば、争いがなくなる。狼と小羊が共に宿る」



と書いてある。そういうことがイザヤ書11章に書かれています。また、66章にもまた繰り返して出てきます。預言者というのは自分が考えもしないようなことを、啓示を受けてそれを語りだすという、そういう面があると思う。そういったことが旧約聖書の中にも出ています。神を知る知識、神の心を心とする、そういう人々によつてこの地上が満ちあふれるならば、いろんな問題はおのずと解けていく。しかし、それは今の世界の現実を見てみたら、現実には望めそうにもありません。しかし、それでも我々は希望を失わない。私にとつて希望は何かというと、イエス・キリストご自身なんです。

「イエス・キリストは昨日も今日も変わりたもうことなし」

とヘブル書の中に出てきます。そのヘブル書というところを見ますと、これはヘブル人への手紙ですから、ユダヤ教からキリスト教へ改宗した、そういったヘブルの人たちに対して——あなたが書いたのか著者はわからないが——キリストは何故に苦しまれたのか、救いとは何か、ということ^{じゆん}を諄々と説き明かしている書です。しかも、励ましの書です。

「信仰とは望むところを確信し、見ぬものを真実とするなり」

と、11章から始まりまして、とにかく、

「ひるむな、どんなことがあつてもへこたれるな」

ということ^{たお}を激励している。そして、忍耐が大事だということを言います。迫害を受けて休れていた人たちは、どんな酷い目にあわされても、

「地上には永遠の都はない」

と、はるかにいただくものを望み見て、それを喜びつつ——神の約束は地上では実現しなかったけれども——それが成就するということをはるかに望みつつ、彼らは召されて行った。そういうことがヘブル書に出てきます。

私たちはそれとは逆に、今地上ではとにかく見えるものが素晴らしすぎるんですよ。あの時代はどうだったか知りません。今は文化文明が進んで、地上で見えるものは素晴らしすぎるんですね。だから、もうそういうものは失いたくないし、そんな「永遠の都」が向こうにあるか見えませんもの。そんな頼りないものを望み見るよりも、

「地上のおいしいものを食べて、楽しい生活をして、みんなで仲良く暮らしていこうよ」

と。幸福度というような、前にブータンから素晴らしいカップルがおいでになりましたが、ああいうのがひとつの理想なんでしょうね。確かにそう思いますよ。戦争も何もなさそうですし。そういう地上での幸せということが人間の願いであることは確かです。

けれども一方では、それは楽天的すぎると、3月11日は我々に示した。我々の願いがいかにでもあれ、この地上というものがいかにもろいものであるか。地上には永遠の都はない。それでは絶望かという、そうではない。見える世界はたとえなくなってしまう、見えない永遠の都が備えられている。そこにキリストが居てください。私はキリストがいらつ



しやらなければ、向こうの世界は興味がない。向こうの世界でキリストが輝いていらつしやるから、光り輝いていらつしやるから、たとえ地上でどんなことがあるうとも、地上の働きが終えたら、さっと迎えていただきたい、

「お前はよくやつたよ」

と、ご褒美をいただく。パウロもそう言っているでしょ、キリストの中でね。

「私は前に向かつて進んでいく。後のものをあとにし、前に向かつている。そしてご褒美をもらうんだ」

と言っています。

「義の冠が私を待っている。たとえ祭壇に血を注いでも、私はもう喜んで向こうへ行く。自分にとって生きるはキリスト、死ぬるは益なり。生きていこうという事は、キリストを信じてキリストを証して生きている。召されればもつと素晴らしい。しかし、地上に居ることがあなた方の助けになるなら、私は我慢して生きておろうか」

と、獄中で言っているわけです。ピリピ書は獄中書簡です。そんなふうには、あの初代の人たちというのは本当に命懸けです。迫害が厳しいでしょ。そういう迫害が厳しい中で、彼らはキリストを望みとし生き抜いたわけです。

●パウロの試練苦難

それからもう一つ申し上げたいことがあります。パウロほどの信仰深い人だったら、どんな苦難が来ても、そこへキリストがさつと現れて、それを防いでくれるのではないか。どんな病にかかろうと、キリストがさつと手を置いて癒してくれるのではないかと。ところが、現実には、パウロの書簡をご覧下さい、全然逆ですよ。彼はもう死にかかっている。

「もう生きる望みは失った」

と、コリント第二の手紙に書いてある。

「自分はもう地上では生きる望みを失って、ただ天上のキリストだけに望みを託した。ところが、そういうところからキリストは私を助けてくださった」

ということをコリント第二の手紙の冒頭に書いてある。

「その慰め、そこで与えられた慰め、それをもって今、苦難の中にいる人たちに慰めてあげたい」

ということをパウロは言う。それからコリント書簡の中で、ここにも引用してありますけれども、パウロがどんなに酷い目にあっているか。ずらざらとリストをあげています。もう酷いもんですよ。なんでキリストは助けてあげなかつたんだろうかと思うくらいに、パウロは酷い目にあっています。それでもへこたれない。

「為せんかたた尽くれども望みを失わず」



「この土の器に宝を持てり」
 「死んでいるようで、見よ、生きておる」
 とか、もう常にひっくり返っているんですね。

「貧しいようでありながら、富んでいる」
 「一切の秘訣を得たり」
 とか、パウロは言っています。そういう生き方、たくましい生き方。それは本当のものを
 見ているから、本当のものをもらっているから、へこたれないんだと思うんです。

我々、大和民族というのは、この奈良もそうですけれども、実に自然がうるわしくて、
 あの西行法師のうたにも、

「願わくは花の下にて春死なむその如月の望月のころ」

と。満月の桜のもとで——梅でもいいけれども——桜のもとで春に召されていきたいもの
 だと。そういう実にうるわしい自然に日本は恵まれていますから、あまり厳しい宗教とい
 うものに親しめない。

「そこまで言わなくてもいいではないか。まあまあでいいのではないか。波風を立
 てないでいいのではないか」

というのが大体、日本流なんです。でも、現実はその許してくれません。ギリギリのと
 ころでやっていく。ところが、日本人というのは直ぐ忘れるんですね。

「あれは過ぎたことさ」
 と、またもとへ戻ってしまう。やはり、そこは一つ一つを踏み台にして進化して行かない
 といけない。

●ひと新たに生まれずば

キリストがニコデモとの問答の中で言われましたね、

「ひと新たに生まれずば神の国を見ることあたわず」

と。人は天から生まれなければと。お母さんのお腹からオギャーと生まれた肉体としての
 我々人間は、それからもう一つの

「新しい誕生をしなければだめなんだ、水と霊とから生まれなければ」

という。ニコデモさんはそのことが分からなかった。

「あなたはイスラエルの先生だろ。それでいながら、こんな単純なことがわか
 らないのか」

と、キリストの方はあきれ顔でしたね。ヨハネ伝3章です。

「風は思いのままに吹く。どこから来て、どこへ行くのかわからない。新しく
 生まれるということもそういうことだ」

と。皆さん、キリストを信じた途端に、



「新しく生まれ変わった」

という自覚がありますか。私はなかったんです。心配事はなくなりました。心は安らかなりました。けれども、

「ああ、霊が来た、キリストが私をひっくり返した」

とか、そんな自覚は何もなかった。

ただやはり、キリスト教と申しますか、素晴らしいのは、みことば聖言があるということです。日本の神道というのは、聖言があるのかどうかは、私は知りません。仏教はありすぎて困る。あまりにもたくさんありすぎて、たくさんのお教の派があつて、法華経だ、やれ何経だとかたくさんあつて、大変です。キリストの方は、イエス・キリストの言葉がある。

「はじめに言ことばありき」

とヨハネ伝にあるように、霊なるキリストが肉体をとって地上に現れた。これを信ずるか信じないかは勝手ですよ。信ずるか信じないかは勝手だけれども、私にとってはものすごくありがたい。向こうの世界のことは次元がちがう。我々は三次元という、この見える世界で生きています。ところが、向こうの次元というのは、全然我々にはわからない。そんな神さまがいらつしやるのか、向こうはこんな世界であるとか、誰かが言つたつて、そんなことは信じられるものかと。大体、誰も言わない。本当のことは言えない。ただ、向こうからやつて来たお方だけが、それを証言できる。それをはずきり言つたのがヨハネ伝ですね。

「自分は天から降くだつて来た。そして、天のことを知っている。誰も天に昇つた者はいない。私だけが向こうから遣つかわされてきた」

と。それも自分で来たのではない。「行け」と言われて、やつて来たんだと。そして、その通りのことを、天界のことを語つていらつしやるのに、誰も受けようとしなない。それはそれでしようね。受けようとしなない。

「神はその独り子を賜つたほどに世を愛したまへり。信ずる者がすべて滅びないで永遠の生命を得るためである」

と、ヨハネ伝3章16節にあります。

「神が御子を遣つかわされたのは、世を審さばくためではなくて、世を救うためである。審判さばきとは何か。光が来たのに、光を避けて闇を選えらぶという、これが審判だ。」

と。光が来たなら、

「ああ、ありがたい。救いが来た。ありがたい」

と飛びつけば、みんな救われるのに、

「そんなものは要りません」

と言つて、自分で背を向けて、自分流の俺流の生き方をしていく。それが審判になっている。キリストもヨハネ伝12章で仰つていますよ。



●キリストは人間とは逆

ヨハネ伝は、12章までが伝道なんです。13章からは弟子たちとのお別れの席です。14章から16章までが訣別の、お別れの言葉を言われ、17章では父に祈られるという祈りです。それから、18章からは受難です。そういうように構成されていますが、その12章に、

「一粒の麦、地に落ちて死なずばただ一つにてあらん。死なば多くの実を結ぶべし」

という、あの有名なところ。それから、最後の方にしめくくりとして、

「私は光としてやって来た。そして、聖言を語った。自分で語っているのではない。私をお遣わしくくださった父なる神が、語れと仰ることをそのまま伝えた。

私は誰も審かない。しかし、終りの時に審くものがあるとしたら、それは私が語った言葉そのものが審く」

と、そう言っておられる。だから、神の言を受けるとか受けないかは人間の勝手なんですけれども、受けとらないということに責任をとらなければいけない。そうでしょ。

「無条件で救ってあげる」

という有り難い聖言が来ているのに、

「そんなものは要りません」

と言ったら、これは自己責任ですよ。私みたいな弱虫はもう有難くて有難くてしようがない。それが私の最後の希望ですもの。何が奪われても、キリストは居てください。キリストに抱かれている者は永遠の生命をいただいている。キリストと同じ姿に化せられるんです。キリストの愛は我々を同じ姿に化してください。それがキリストの愛です。一人ひとりをご自分と同じ永遠の生命者になさる。しかも単なる長寿じゃない。永遠というのは質的に変わらないということです。時間ではない、質的なものです。そして、キリストの本質とは何か。愛そのものです。父への信頼。「信仰・希望・愛」とありますように、そういうお方です。そういうったキリストの内実を持った我々に造り変えてくださる。

生まれながらの我々はエゴです。それはどんなに口で立派なことを言ってもエゴですよ。自己中心ですよ。自分が一番大事なんです。自分を犠牲に献げて、人を救う素晴らしい人もたまにはありますけれども、本来的に人間はエゴイストです。自己中心です。

「自分の言う通りにしてくれる神さまなら信じたいけれども、言う通りしてくれない神さまは退ける」

というのが、一般的に日本人の宗教心と言いますかね。それに対して、キリストの方は逆です。

「己を棄てろ」

「己を憎め」

とか言うでしょ。全く逆を仰るから、いくら頑張ったって、広がりようがないですよ。人



間性に反していることをキリストは言っている。だから、広まりっこない。しかしながら本当は、本ものは本ものなんです。

「我は道なり、真理まことなり、生命いのちなり」

と言われた。その道というのは、何が来ても変わらない一本道、光の道です。

「私は永遠の生命だ」

という。何が来たつてびくともしない。放射能であろうが何であろうが、そんなものとは全然質がちがう。永遠の生命だと。本ものであると。何が偽りであろうと、世の中にどんなに信じられないものばかりあつても、私だけは本ものであると、キリストは胸を張つていらつしやる。しかも、愛そのものである。自分の身を犠牲にして、我々罪びとを救つてくださった。

はつきり言つて、我々はどなたさまも、本当の神さまの前に、キリストが父と呼んでおられる神さまの前に、胸を張つて立てるかという、誰も立てない。そんなものは立てないですよ。何も旧約聖書だけではない。旧約聖書では、神さまを見たら死ぬんですから。神を見たら必ず死ぬ。だから、神さまが通つて行くときには、岩陰に隠れないといけない。そういうことが出てきます。

罪びとはその光に耐えない。その本質は何かというと、エゴでしょ。罪というのはエゴです。神さまを神さまとして尊ぶのではなくて、

「自分にとってプラスになれば尊んでやろうじゃないか。自分の言うことを聞いてくれるなら信じてやろうじゃないか」

と。どこまでも人間が主なんですよ、「信仰、信仰」と言いますが、だから、

「祈りが聞かれなかつたら、こんな神さまは棄てよう。いつも言うことを聞いてくれない神さまなんか棄てよう」

なんて、そういう信者さんがおりますよ。

●試練を通して我々の霊が高められていく

ヒルティさんの『眠られぬ夜のために』『幸福論』という本が岩波文庫から出てますが、このヒルティさんというのは素晴らしい方で、

「試練、苦難、艱難、そういうものが人間を鍛えあげて、本ものにしていく」と言っている。ヤコブ書にもある。

「試練に出会つたら、それをひたすら喜べ」
と書いてある。ペテロもそうです。ペテロ第一の手紙の中に、

「*shimazumana* 試練にあつても、あなたは輝いている。それはイエス・キリストを信じている。表現しようもないほどの素晴らしい輝きをもつてあなた方は輝いている。それは魂の救いである。永遠の生命をいただいているからであ



る。」

ということペテロは言っています。ヤコブは、

「試練にあつたら、ひたすらこれを喜びにせよ」

と言うわけです。ヒルティさんも、

「試練、艱難、苦難、それが来るたびに人の魂は練り鍛えられて、ますます神さまに近づいていく。試練にあわない魂は凡庸な魂で、いつまでも成長しない」

と言う。ペテロ書もそうでしょ。純金というのは何度も何度も練られて、とうとう精錬されて最後に純金になるようですね。そのように、苦難とか試練とかいろいろなものを通して我々の霊が高められていくようですよ。

「信じさえすれば救われる」

というのは本当なんです。でも、「信じさえすれば救われる」というレベルと、「救われた」というのに対して、

「生まれ変わった魂が成長していく」

ということはまた別です。人間はオギャーと生まれてきて成長していくわけですよ。そのプロセスでは烈しい受験戦争もあるようで、あんなのはなくていいと思うけれども。とにかく、人間は成長していくわけです。成長が止まったらお終いなんです。肉体的な成長ではないですよ、精神的成長も含めて、成長していく。そのように、新しく生まれた人も霊が成長していかなければならない。その成長させてくれるのがいろんな試練なんです。

新約聖書は決して、この地上は安泰であるとか、この地上は永遠に続いていくとか、どこにも書いてない。別な言葉でいうと、終末の迫りです。ペテロ書簡でも、

「天体が焼け崩れる」

とか、そんな表現で言ってますね。

「それを遅らせておられるのは、一人でも多くの人が救われるようにあえて延ばしておられるのだ」

というように言い方をしています。その真義のほどは私は知りません。この地球がどうなるのか、この宇宙がどうなるのか、そんなことは知りませんが、少なくとも人間自身は必ず終末があります。

日本の最高齢の方は115歳くらいでしょ。しかも、115歳でピンピンして輝いて向こうへ行かない。大体、弱っていききますものね。だから、115歳で輝いて、やがて羽が生えて、向こうへ飛んで行ったということになったら、これはもうギネスブックものですけども、そういうことはありませんね。旧約聖書では、

「エノクは見えずなりき」

という。エリヤは火の車に乗って向こうへ行きました。それを見て、エリシヤは直ぐ預言者になりました。そういうのはたまにあります。



最高はキリストですよ。祈っておられたら、変貌されます。モーセとエリヤが現れてきた。どういう出現世を、つまりどういう死に方をなさるかを協議していたという。ペテロやヤコブは呆気にとられて震えていたようなことが福音書に出ています。あれは全部、私は本当だと思っっている。キリストほどの方ならば、それは祈れば変貌なさるはずですよ。そう思っっているものから、そのキリストが十字架のあとで、あの素晴らしい霊体となって現れてこないはずがない。当然のことです。そして、

「あなた方も同じようにしてあげよう」

というのがキリストの恵みなんですよ。要らん人は要らんでもいいですよ。私は欲しい。地上でどんなことがありましても、最後にそういう変貌をして生まれるならありがたい。

●お前は地上で精いっぱいやれ

私が天上のことをこうやって語りますと、

「それでは、地上はどうでもいいの?」

と。ちがうんです。

「だから、お前は地上で精いっぱいやれ」

ということですよ。この地上は確かに永遠の都ではありません。けれども、神さまがお造りになっているこの地上です。神さまがいろんなものをお備えになっている地上です。暫定的な生命の地上かもしれないけれども、それを愛おしんで、

「精いっぱいそこで愛を貫け。信を貫け、真理に生きろ」

と。いわば、天上の鑄型なんですね、天上の素晴らしさを投影しているだけだと思う。それが本当の姿でないから、キリストは、

「天においてあなたの御意が成っていますように、地上にも成らせてください」

というのを、主の祈りで祈られた。

「聖名を崇めさせてください」

と。特にあの主の祈りのところで、

「天において御意が成っているように地上にも成らせてください」

と祈られた。だから、地上なんかどうでもいいなんて全然思っついたらっしやらない。でも、地上はあまりにも御意に反するようなものが充満していますから。これは神に敵対する霊です。サタンといわれている、そういう霊力に振り回されて、人間は苦しんでいる。そこから回復しようとしてキリストは来てくださったにちがいないと思います。

ですから、キリストを信じて救われた方々、別な言葉でいうと、キリストの霊をいただいた方、キリストの霊をいただいて新しく生まれた方々は、地上で責任があるんです。御意を伝えていくという責任がある。しかも、御意が何であるかとか、向こうの世界が何であるか、というのは神さまに教えてもらわないと絶対にわからないと私は思っています。



見えるものを見ていただけでは、全然それは想像もつかないと思う。

けれども、天から降^{くだ}ってきた方が、「こうである」と。そして天に帰られた方が、「こうである」と仰^{おほ}ってくださいれば、それに委^{まか}ねて行こう。ですから、私にとつては聖書を離れては、天国も想像できないんです。イメージが想像できない。この新約聖書を開いてますと、何かまるで——「おもちゃの兵隊」という歌がありますね、夜中におもちゃの兵隊が踊りだすという——それなんですよね。こういうものに触れてないと、見えるものに囚^こわれます。しかしながら、これを開きますと、この中からキリストが現れてくれるわけです。

「ああ、なるほど。こうなんだよな」

と。だから、毎日毎日、聖言と生活を共にしないとイケない。向こうの世界に行けば、それは要らんとする。それが普通なんです。こつちでは、この聖言の世界は例外なんです。まるで水と油みたいに敵対関係にあるようにさえ思う。でも、パウロは言ってますよ、

「我々に見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に続くからである。そして、この地上の身体が破れると、天にある壊^{こわ}れない新しい建物をいただく」

という。建物の警話^{たごえはなし}をとりながら、我々の地上の身体と、向こうで賜^{たま}う霊体^{たま}のことを言っています。パウロさんという方は第三の天にまで引き上げられた経験を持っている。あまりにも素晴らしいので、傲慢^{ごうまん}にならないために、うぬぼれないために、肉体に刺^さを与えられたという。それを取ってくれと頼^{たの}んでも、取^とっていただけなかつたことを、コリント書の中で言っています。だから、ごく少数の方は向^{むか}うの世界^{せかい}を見ている。

キリストは向^{むか}うから来たんだから、故里^{ふるさと}から来て、また帰^{かえ}って行った。私はまるで「かぐや姫」だと言^いうんですよ、キリストのことを。そうでしょ。かぐや姫はお月さんから来たから、お月さんに帰^{かえ}らなければなりません。

「お爺さん、お婆さん、お世話になりました。まもなくお迎えが参ります」

と。天守さま始めいろんな軍勢^{いくさ}がかぐや姫を守ろうとしたけれども、まぶしくてどうにもならなかつたという、竹取物語は子ども心に素晴らしいなと思いますよ。

キリストは天から来たから天へ帰る。しかし、天から来たけれども、地上で使命^{しめい}があつた。それが我々の「罪の贖^{あがな}い」ということ。そして、「永遠の生命^{いのち}」を実証^{じつしやう}するということ。神の国は本当だということを、わずか三年の伝道生活^{でんどう}をとおして証^{あかし}しされました。

●キリストの弟子

我々はあとに続くものです。時代的にはあの時代と今とはまるで様子が違います。まるで違いますけれども、人間としての本質^{ほんしつ}は、人間は霊的存在^{れい}である。「ひと」というのは「霊止^{ひと}」「霊が止まる^{とど}まる」という。

「ひととは神霊^{かみたま}が止まる存在^{しん}である」



と、大言海という大辞典に出ている。それもここにちゃんと書いてありますから。神霊が止まる存在です。でも、みんな神霊がぬけてしまった。人間は文化文明に毒されて。昔だったら、信心深かったから、山には山の神がいて、海には海の神がいて、いろんなものを神さまの一つの現象だというふうに受けとつたんでしょうね。「かみなり(雷)」というのは神さまが鳴っているわけですよ。それがもう賢くなつてしまつて、全部科学的に分析して、完全に霊界というか、天界というか、神さまの世界から絶縁されてしまつたのが文化文明だと思えますけれども。それをもう一度回復しないとイケない。それをキリストが願っている。

「イエス・キリストは昨日も今日も変わりたもうことなし」

と、ヘブル書(13・8)に出てきます。キリストは伝道のときにも、

「私は今日も明日も次の日も進み行く」

と、常に前に向かって進んでおられる。

二千年経^たとうがどうなるうが、我々が本当にキリストの弟子となる。キリスト者というのはキリストの弟子ということ。キリスト者とは何か。キリストの霊をいただいた者。そのキリストの霊をいただくとは、どうやっていただけるのか。十字架は、無条件にくださる。私たちは、生まの人間では肉の人間は、霊なる神さまと繋がりを持てない。肉なる人間は、エゴというものが邪魔していますから。

キリストはエゴがないわけです。仮にあつたとしても、それは完全に否定されてしまつている。ヨハネからヨルダン河で洗礼を受けられて、水から上がつて祈つておられたら、霊界の天が開けて、聖霊が鳩のごとく降つてきた。

「これは愛する者、わが愛^{いと}しの子なり」

という声がして、聖霊を受けられたわけです。そして、そのあと、御霊に導かれて、荒野で四十日四十夜、サタンと闘いをなされた。誰も助けてくれない。獣だけがいたと書いてあります。それで、サタンに勝つて、初めて伝道が始まりました。キリストはそういうお方なんです。もう本当にナチュラルに神の霊を受けてしまつた。

我々はナチュラルには受けられない。自我という罪がある。「罪」というのは、「あれをやつた、これをやつた。こんな悪い思いをいただいた」

というのは枝葉の問題でありまして、根本が根源が神さまに敵対していること。だから、存在そのものが神さまと敵対している。悲しいけれども、聞きたくない言葉ですけれども。

「自分よりも何よりも神を愛する」

なんていう人がおりますか、ナチュラルに。

●キリストの十字架

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、何々を尽くして汝の主たる神を



愛せよ。己の如く隣人を愛せよ。これが律法である」

とキリストは言われた。そんなことを無条件にできる人は誰もいない。キリストだけです。ということは結局、我々はこの生身の人間のままでは神さまと縁結びはできない。神さまの霊を受けられない。それで、キリストは

「私が代わりにやりましょう」

と仰る。だから、十字架を仰ぐということは、十字架を見るということは、そこに自分がキリストと一緒に付けられているということを確認することなんです。我々が知らないところでキリストは、過去の人間、人類、これからの人たち、その無限無量のそういった罪というものを全部背負ってくれた。パウロも言いました。

「われ主と共に十字架せられたり。もはやわれ生くるにあらず。キリストわがうちにありて生きたもうなり」

と。これは個人個人が体験してくださらなければダメなんです。公式ではないんですよ、方程式ではない。一人ひとりが本当に十字架の死をイメージして、そこに自分も一緒に付けられている。同時にそこで私も一緒に死んでいると。

それで私はこの本にも書きました、

「キリストは無理・心中をなさった」

と。こつちが望んでもいないのに、私を勝手に抱きかかえて、十字架にかかって、神さまに対して、

「彼と一緒に私は死にました。だから、彼はもう罪がありません。私の十字架の血潮で彼はもう潔められています。私が全部救いとりました。生命を彼にやってください」

と。その生命が聖霊なんです。だから、十字架で完全に罪なき人にされたら、そこに必然的に神の聖き霊きよが臨んでくる。コインの裏表なんです。

「十字架だけは受けとりましたが、聖霊は受けとりません」

というのは成り立たないんですね。キリストは罪がないから、サツと聖霊がおいでになった。神さまはお送りになった。けれども、我々人間は、キリストが全部引き受けたんです。

「お前の過去・現在・未来を根本的に、根底的に全部きれいにした。真空にした」と。それを放っておけば、悪しき霊が来ますよ。そんなことは許されない。

「きれいに掃除されていると、悪霊が七つの悪鬼を連れてやって来る」

とかいうお話がありますね。ですから、キリストが十字架で本当に私という全存在を——これは「贖い」という言葉で表現するしかない——すっかり主と共に十字架にいれられて、キリストは、

「お前の過去・現在・未来を全部、私が片づけた。お前はきよい。問題なし」と。それを



「はい」
と受けとるだけです。「はい」の次は、

「ありがとうございます」

と言う。そして、さつき言いましたように、

「父よ、彼らを赦したまえ」

でしょ。もうああいう言葉を聞くと涙が出るんです。

「そこまでして、あなたはお救いくださいましたんですか。今まで何も知りませんでした。西洋歴史でキリスト教のことを習ったけれども、全然無関心でした。申し訳ありません」

と。中学校の一年生のとき歴史で習った。でも、そのときは、

「ああそうか。ナザレのイエスという方がいたのか」

という程度でした。

●癒しの伝道

私は24歳になろうとするときに行き詰まって、どうにもならなくなって、毎日毎日、朝起きるのがつらい。

「また嫌な一日が始まるのか。このまま目覚めなかったなら良かったのに」

と、そういう毎日毎日でした。そのときに、イエス・キリストを伝えてくれた友人がいた。彼は輝いていて、3月に聖霊のバプテスマを受けたと言ってましたから。彼に私は7月7日に会った。彼は燃えていましたよ。その方は後に聖書学者になりましたけれども。顔を見たら、月の光に輝いている。

「ああ、俺はなんと惨めなんだろう。この人はなんの生活の保証もないのに輝いている」

と思った。

「奥田君、なんでそんなに心配なんですか」

と言われた（笑）。これは参った、負けたと思った。それは土曜日の晩でしたので、その翌日に、

「今、説教師が故郷に帰っていて、自分が代行しているから集会にいらつしやい」

と言うので、喜んで行きました。四畳半ほどの小さな民家を借りて集会をしている。あんなに目覚めのうるわしい朝はなかったように思います。それで一番に行きました。それからですよ、このキリストに従うようになったのは。

その年にオズボーンというアメリカの伝道師が来て、癒しの伝道をやった。京都の大丸の横の空き地で一か月くらい続いた。私は始めの二週間くらいしか行ってませんけれども。あれは凄かった。33歳の若い伝道師でした。彼はインドネシアとかあちこちの所で癒しの



伝道をやってきて実績があった。特別な賜物たまものなんでしょうね。それを見ましたら、

「ああ、キリストは生きておられるんだ」

と思った。彼が言うには、

「キリストは昔も今も変わりたもうことなし」

と言う。彼はそのあとで余計なことを言いました、

「あなた方が行っている教会で、手をお按おいて癒してくれないような牧師だったら、そんなものは信用しなさんな」

と。これは言い過ぎだと思いました。

「病める者に手を按おけば癒されると書いてあるでしょ」

と、三段論法で言うんです。

「神の言葉は変わることなし。手を按おけば癒される。それが実現していない教会は、やめなさい」

なんて言うから、私はそのあとに思いました、

「これは特別な賜物をもらった方だ」

と。彼を私は否定はしません。彼は本ものなんです。けれども、それをもって普遍化したら、病院に行く必要がなくなってしまうんですよ。

●キリストの癒しと病院の医療

私は、キリストの癒しという賜物、神さまによる癒しというものと、病院で最先端の医療のお世話になるということがどうつながるのか、ということが永いあいだの謎でした。でも、私は両方を肯定します。神さまのなされることと、しかし人間が一生懸命に人類の幸せのために医学を発達させて、それで苦しんでいる人を助ける。これは素晴らしいことだと思う。現に私の家内が今、京都大学の病院で最先端の治療を受けています。ありがたいことです。

私が本気で思いますのは、

「全てを癒してくれなければ信じない」

「信じていれば必ず癒える」

とか、そういうものではないんです、私の今の心境は。御手から全てを受ける。どんなことがあろうと、主を疑うようなことはありません。

「キリストは昨日も今日も変わりたもうことなし」

「地上には永遠の都はない」

という。だから、何が起ころうと、キリストの中に自分が生きていくかぎり、妻がキリストの中に抱かれてあるかぎり、どんなこともそのまんま、

「ありがとうございます」

と受けとる。



妻はこの月曜日、火、水と本当に危険な状態だったけれども、木、金で、特に昨日は非常に私からみても平安で、痛みもなくいい状況で、いろんな話もできて、素晴らしい一日でした。9時に別れたけれども、病室を出るときに何べんも手を振ってくれました。私は正直、

「このまま召されることがあっても、これでなんの思い残すこともない」と、そこまで思いました。本当にそういう永遠なひとときを与えられたという思いをいたしました。

ですから、私たちはどんな状況にありましても、本当にキリストの中にあるということ、キリストがそば近くにいてくださるということ。キリストから全てをそのまま受け入れる。

「こうしてくれなければダメです」

なんて駄々をこねない。一切を御手からいただく。キリストは一切を父の御手からいただくことができましたね。そのように、どんなこともそのままいただく。そして聖名を讃える。これが最高ではないでしょうか。

いかなることも、主の御手から安んじて受けるという世界、断じて気落ちしない。ヒルティはそういうことを『眠られぬ夜のために』の「3月15日」のところで言っています。

「あなたの憂いをすべて主にゆだねよ、主はあなたに代り配慮される。

あなたの家族のための憂いをわれらの信ずる主にゆだねよ、

あなたはいたずらに策を案じ考えるだけだ、

しかし主には行く道と将来が開かれてある。

主は心配をきらうが、あなたがささげる天に向っての祈りはよろこんで聞き給う。

あなたがやつと一つの策を立てる間に主は千もの策を持っていられる。

なにびとも勝手気ままにあなたを害することのないように、

主はあなたへの恵みのためにみんなの心を小川のように導かれる。

主のみ手から苦しみも喜びも安んじて受け、ひるんではならない。

主はあなたの運命をすぐにも変えられる。

しかしそれを悪くするのは、あなたの嘆きだ。

いたずらにあなたを苦しめるために苦難が与えられたのではない。

信じなさい、まことの生命は悲しみの日に植えられることを。」

「まことの生命は悲しみの日に植えられる」という。だから、我々の人生では、悲しいこと、辛いこと、いろいろなことがまごま現れてきます。しかし、どんなときにも神を呪ったりなんかしない。主は常に最善を備えてくださるという。我々には分からなくても、主は我々一人ひとりのために最善を備えてくださる。これを言っているのがローマ書8章なんです。



●ペテロの手紙

今日は皆さんのお手元に聖言をたくさん引用したものをお配りしました。ペトロ第一の手紙1章3節から、

「³……神は豊かな憐れみにより、わたしたちを新たに生まれさせ、死者の中からのイエス・キリストの復活によって、生き生きとした希望を与え、⁴また、あなたがたのために天に蓄えられている、朽ちず、汚れず、しほまない財産を

つまり御国を、

受け継ぐ者としてくださいました。⁵あなたがたは、終わりの時に現されるように準備されている救いを受けるために、

向こうの世界の本当の完成ですね、

神の力により、信仰によって守られています。⁶それゆえ、あなたがたは、心から喜んでいるのです。今しばらくの間、いろいろな試練に悩まねばならないかもしれませんが、⁷あなたがたの信仰は、その試練によって本物と証明され、火で精錬されながらも朽ちるほかない金よりはるかに尊くて、イエス・キリストが現れるときには、称賛と光栄と誉れとをもたらすのです。

彼らは、イエス・キリストが再び来てくださるといふことを、直ぐにも来られるということとを信じていたんです。でも現実には、おいでにならなかった。私は、向こうに行ったときに直ぐに迎えていただけると信じているんです。こちらが向こうへ迎えられるときに、もう目の前でキリストにお会いできると信じている。

⁸あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛し、今見なくても信じており、言葉では言い尽くせないすばらしい喜びに満ちあふれています。⁹それは、あなたがたが信仰の実りとして魂の救いを受けているからです。」(ペトロ

一1:3-9)

それから、ペトロ第一の手紙4章12節から、

「¹²愛する人たち、あなたがたを試みるために身にふりかかる火のような試練を、何か思いがけないことが生じたかのように、驚き怪しんではなりません。

¹³むしろ、キリストの苦しみにあずかればあずかるほど喜びなさい。

これも迫害に対してだと思えます。

それは、キリストの栄光が現れるときにも、喜びに満ちあふれるためです。

¹⁴あなたがたはキリストの名のために非難されるなら、幸いです。栄光の霊、すなわち神の霊が、あなたがたの上にとどまってくくださるからです。」

そんなことを言っています。それから、ペテロ第二の手紙3章8節から、

「⁸愛する人たち、このことだけは忘れないでほしい。主のもとでは、一日は



千年のようで、千年は一日のようです。⁹ある人たちは、遅いと考えているようですが、主は約束の実現を遅らせておられるのではありません。そうではなく、一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです。¹⁰主の日は盗人のようにやって来ます。その日、天は激しい音をたてながら消えうせ、自然界の諸要素は熱に熔け尽くし、地とそこで造り出されたものは暴かれてしまいます。¹¹このように、すべてのものは滅び去るのですから、あなたがたは聖なる信心深い生活を送らなければなりません。¹²神の日の来るのを待ち望み、また、それが来るのを早めるようにすべきです。その日、天は焼け崩れ、自然界の諸要素は燃え尽き、熔け去ることでしょう。¹³しかしわたしたちは、義の宿る新しい天と新しい地とを、神の約束に従って待ち望んでいるのです。」(ペトロ二3:8~13)

●パウロ、ヤコブの手紙

それから、コリントの信徒への第一の手紙10章13節から、

「¹³あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずで、神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます。」(コリント一10:13)

これは本当ですね。それから、ヤコブは、さつき言いましたように、「いろんな試練に出会うときは、この上ない喜びと思いなさい」と言っている。ヤコブの手紙1章2節から、

「²わたしの兄弟たち、いろいろな試練に出会うときは、この上ない喜びと思いなさい。³信仰が試されることで忍耐が生じると、あなたがたは知っています。⁴あくまでも忍耐しなさい。そうすれば、完全に申し分なく、何一つ欠けたところのない人になります。」(ヤコブ1:2~4)

霊的に成長するということでしょう。

「¹²試練を耐え忍ぶ人は幸いです。その人は適格者と認められ、神を愛する人々に約束された命の冠をいただくからです。」(ヤコブ1:12)

それから、ローマの信徒への手紙5章1節から、

「このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、²このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。」

ここで「希望」が出てくるんです。

³そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、



苦難は忍耐を、⁴ 忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。⁵ 希望はわたしたちを欺くことがあります。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。⁶ 実にキリストは、わたしたちがまだ弱かったころ、定められた時に、不信心な者のために死んでくださった。⁷ 正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のために命を惜しまない者ならいるかもしれません。⁸ しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。」(ローマの信徒への手紙5:1-8)

そういうことを言っています。それから、次の8章18節、

「¹⁸ 現在の苦しみは、将来わたしたちに現されるはずの栄光に比べると、取るに足りないと思えます。¹⁹ 被造物は、神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいます。²⁰ 被造物は虚無に服していますが、それは、自分の意志によるものではなく、服従させた方の意志によるものであり、同時に希望も持っています。²¹ つまり、被造物も、いつか滅びへの隷属から解放されて、神の子供たちの栄光に輝く自由にあずかれるからです。²² 被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。²³ 被造物だけでなく、²⁴ 霊の初穂をいただいているわたしたちも、神の子とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます。²⁴ わたしたちは、このような希望によって救われているのです。見えるものに対する希望は希望ではありません。現に見ているものが見えぬものをお望むでしょうか。²⁵ わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです。²⁶ 同様に、²⁷ 霊も

この「²⁷ 霊」というのは御霊のことです。御霊も、

弱いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、²⁸ 霊 自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださるからです。²⁷ 人の心を見抜く方は、

神さまですね、

「²⁸ 霊の思いが何であるかを知っておられます。²⁹ 霊は、神の御心に従って、聖なる者たちのために執り成してくださるからです。³⁰ 神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています。」

これですね。どんなことがありましても、すべてはプラスになる。究極的にプラスになる。そのことを知っている。それはなぜかという、御霊が共に祈り、執り成し、最善を願ってくださっているから。そして、神さまもそれをしっかり受けとめて、私たち一人ひとり



のために最善が成るようにしてください。

²⁹神は前もって知っておられた者たちを、
我々のことなんですよ。

御子の姿に似たものにしようとあらかじめ定められました。それは、御子が多くの兄弟の中で長子ちやうしとなられるためです。³⁰神はあらかじめ定められた者たちを召し出し、召し出した者たちを義とし、

「義とする」とは、「ご自分の中に受け入れる」ということです。そして、受け入れてくださった者たちに、

義とされた者たちに栄光をお与えになったのです。

だから、何が来たって大丈夫だというのが最後の31節からです。

³¹では、これらのことについて何と言ったらよいだろうか。もし神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか。³²わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありませんか。³³だれが神に選ばれた者たちを訴えるでしょう。人を義としてくださるのは神なのです。³⁴だれがわたしたちを罪に定めることができましょう。死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、わたしたちのために執り成してくださいなのです。³⁵だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができましょう。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。³⁶「わたしたちは、あなたのために一日中死にさらされ、屠られる羊のように見られている」と書いてあるとおりです。

これは詩篇の中に出てきます。

³⁷しかし、これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛してくださいる方によって輝かしい勝利を収めています。³⁸わたしは確信しています。

死も、

相対的な死です。

命も、

相対的な命も、

天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、³⁹高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。」（ローマ8・18～39）

キリストも言ってくださいました、

「あなた方は、この世では艱難がある。しかし、勇気を出しなさい。私は既に



世に勝っている」

と仰いました。このヨハネの14章からの、聖霊を与えるという約束、これも皆さん、お読みくださればありがたいと思います。

●「アメージング グレース」

それから、今日のあとの音楽会で演奏してくださる「アメージング グレース」の翻訳をちよつと皆さんと味わって終りしたいと思います。この翻訳は初めて今日拝見いたします。音楽はなんども聞いて、素晴らしい音楽だなど思っていましたけれども、この歌詞がまた素晴らしいので、今日、皆さんとご一緒に味わいたいと思います。

「アメージング グレース」

何と美しい響きであろうか

私のような者まで救ってくださる

道を踏み外しき迷っていた私を

神は救い上げてくださり

今まで見なかった神の恵みを

今は見出すことができる

神の恵みこそが私の恐れる心を諭し

その恐れから心を解き放ち給う

信じることを始めたその時の

神の恵みの何と尊いことか

これまで数多くの危機や

苦しみ誘惑があったが

私を導き給うたのは

他でもない神の恵みであった

主は私に約束された

主のみ言葉は私の望みとなり

主は私の盾となり私の一部となった

命の続く限り

そうだ この心と体が朽ち果て

そして限りある命が止まるとき

私は帳とばりに包まれ

喜びと安らぎの時を手に入れたのだ

やがて大地が雪のようにとけ

太陽が輝くのをやめても

私を召された主は

永遠に私のものだ

何万年経とうとも

太陽のように光輝き

最初に歌い始めたとき以上に

神の恵みを歌い続けることだろう

●祈り

それではまことにまとまりのない、とりとめのないお話でしたけれども、これで講演を終ることにいたしました。お祈りして、この第一部を終えたと思います。

父なる天のおん神さま。我々の救い主でありたもう主イエス・キリストさま。聖霊となつてこの場にご臨在くださり、充滿してくださっている御霊の主さま。

今日、2月11日、こうして多くの方々をそれぞれの所から、東京からもおいでくださいましたし、諸所方々からあなたがたをお誘いくださり、お集めくださったことを感謝いたします。弘野先生が本当に身をけずって用意をしてくださいました。あなたの御恵みによって病



床の妻も今、安らかな中にあることを信じ感謝いたします。我々の存在はまことに常に危機的な存在です。その危機的な存在でありながらも、あなたの御手のうちにしつかりと守られ、大安心の現実の中に置いていただけることを感謝いたします。

どうぞ、我々の同胞たちが、

「キリスト教というのは異国の宗教ではない、どんな人にも必要な太陽のような存在である」

と。キリスト・イエスご自身は太陽のように万物を照らし、地球を照らし、輝いていくださる救い主であることを、宗派のいかんと問わず、悟ってくださいますように。そして、その恵みによって本当の生命に生きてくださいますように。そして、どうぞ、この世界は、あなたの御心を心とする世界に変わりますように。一人ひとりの心から始まります。どうぞ、今日お集まりになった一人ひとりをあなたのお弟子としてお用いください。あなたの祈りを、どうぞ、実現する器としてお用いください。主イエス・キリストの尊い聖名を通して、この祈りを御前にお捧げいたします。アーメン。

